

未来と将来：二つの問い

長善寺 釋文隆

わしも八十五を過ぎたので警察へ行つて免許証を返してきた。ちよつと不便になつたけど危ないでな。もうじきお迎えも来るで。そういやこの前のフレイルの予防教室で面白い話を聞いたんじや。ご講師の方は3つの質問をされた。一つ目は「いつまでも元気でいたい。でも必ずその時が来る。どういう死を迎えたい？」と聞かれたんじや。もちろんわしは迷惑をかけずに死にたいとは願っているけど、その時が来たらみんなにお礼を言つて死にたいな。みんなに「ありがとう」と。それが言えたら幸せじやな。

二つ目の質問は、「頂きたいのちをどう使いたいか？」じやつた。ご講師の方はきんさんぎんさんの例を話された。百歳の姉妹がTVに出て、出演料を何に使うか聞かれたら、「老後のために貯蓄します。」と答えたという。百歳でも老後があるんじや。今生きているんじやからそうだなと感心した。

わしは自分の一日の暮らしを考えてみた。朝起きる。トイレに行く。ちゃんと出るものが出て下れる。お仏壇に参つて感謝のお念仏。それからおいしい朝食を作つてくれた嫁にも感謝。外に出てケジを取っていると、小さな花が咲いている。これも感謝やな。こつやつて動ける体に感謝。一日働いて夕焼けの空を見るとなんてきれいなんやと思う。御夕事で感謝のお念仏。孫子のためにこんな年寄りでもできることがある。これも有難いな。

三つ目は、「死んだ後どうしたいか？」えつ？と思つた。そんなことは考えたことがない。何もできんようになることが死ぬとい

うことじやないかいな。戸惑つていると、ご講師は民俗学者の柳田國男の話をされた。

戦争が終わつたとき、若い兵士が外地で亡くなつた。彼らはどうなつたんだろうかと柳田さんは真剣に悩んだという。ある村で聞き取りをした後、帰ろうとバス停で待つていると、お爺さんが隣にきて座つた。そのお爺さんと話が弾んだ。最後にお爺さんが「わしは死んだらご先祖様になる。」と実に嬉しそうに語つたという。お爺さんがご先祖様を大事に生きてきたことがわかるし、その恩恵を感じながら仕事をしてきたことも感じられる。戦争で亡くなつた若い人たちはご先祖様になれたんだろうか。

ご講師はそういうことを語り、さらに「死んだら浄土に生きっぱなしではない。還相の菩薩となつてこの娑婆に帰つてきて有縁のものや衆生を救うことができる。」と語つて、ご自身のはるか前に亡くなつた祖父の働きのことを語られた。ご講師にも孫が生まれたという。「孫が帰つて行つたとき、母がおじいさんはお前が初孫やつたでかわいがつたなあとつぶやく。その瞬間四〇年以上前に亡くなつた祖父のことが次から次へと浮かんできた。そして、かわいがつてもらつた祖父に何のお返しもしていなかったことに気がつく。でも、自分が孫に対してそうであつたように祖父もお返しなんかこれっぽつちも考えていなかったと感ずる。だから、祖父からもらつた贈り物（恩）は順番に孫や後から来る者に贈つていくしかない。」と。

わしは思つた。これは先の話ではない。今の話だ。わしが死んでもこの世界が消えるわけではない。この人生でいろんな経験をいっぱいさせてもらつてありがたかつたけど、自分の生き方が試されていると感じた。まだまだこれからじや。